

今日の福音から、わたしたちは何を読み取り、何を学ぶべきなのでしょう。

今日の福音は、イエスを迎えたイエスの故郷で起こった出来事を語っています。しかし、注意深く味わうと、今日の福音はそこで起こった出来事を語ることによって、そこで起こらなかったことを語ろうとしているのではないかとも思われます。先週の日曜日、わたしたちは、イエスの衣にすがりつくことによって不治の病を癒された女性の物語と、愛する娘を失った会堂長のヤイロのためにその子を生き返らせてくださったイエスの驚くべき奇跡の物語を味わいました。

けれども、今日の福音のイエスの故郷の場面では、そのようなことは何も起こらないのです。今日の福音の全体は、先週の福音におけるイエスと、今日の福音のイエスがわたしたちに示している明暗は何によるのかということをおわたしたちに問いかけているように思えないのでしょうか。先週の福音の場面では、あのような目覚しい力ある業をなされたイエスが、今日の福音の故郷の場面では、「そこでは、ごくわずかな病人に手を置いて癒されただけで、その他は何も奇跡を行うことがお出来にならなかった」と語られているからです。

今日の福音は、「イエスはそこを去って、故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った」という場面設定のことばによって始まっています。今日の福音はマルコ福音書の6章のはじめの部分ですが、「イエスはそこを去って、故郷にお帰りになった」と語り始めることによって、マルコ福音書は意図的に先週の福音の出来事と今日の福音の場面とを結び合わせようとしているように思えます。

もう少し、今日の福音の出だしの部分にこだわって味わってみると、ここでは、イエスの故郷の地名が出てこないことに気付きます。イエスがお育ちになったイエスの故郷はナザレであることをわたしたちは知っています。イエスはその出身地である故郷の名によって、ナザレのイエスと呼ばれていたことも知っています。それにもかかわらず、マルコ福音書はなぜここで、ナザレというイエスの故郷の名を語ろうとしないのでしょうか。イエスの故郷がナザレであることは広く知られていることであるので、それに触れる必要はないと思ったのかもしれません。しかし、ここにも、今日の福音によってマルコ福音書が語ろうとしていることの隠された意図を見出すことが出来るかも知れません。マルコ福音書があえてイエスの故郷の名を語らないのは、ナザレの地名を挙げれば、今日の福音が語ろうとしていることは、かつて、ナザレというイエスの

故郷の町で起こった出来事に限定されてしまうからです。そのために、マルコ福音書はあえてその名をここで省略しているのかもしれませんが。

イエスは御自分の故郷に来られることによって、何をなさろうとしておられるのでしょうか。故郷に錦を飾るといことばがありますが、イエスにとって故郷とはそのようなところではありません。今日の福音はマルコ6章に語られている場面ですが、マルコ福音書はこの前にも、おそらくナザレに住んでいたであろうイエスの身内の人々を登場させています。その人々は、「イエスのことを聞いて取り押さえに来た。『あの男は気が変になっている』と言われていたからである」と語られています。イエスの母と兄弟たちが訪ねて来たとき、イエスは「わたしの母、私の兄弟とは誰か」と言われ、周りに集っている大勢の人々を指し示して、「ここに、わたしの母、私の兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、わたしの姉妹、また母なのだ」と言われたのでした。ナザレは確かに母マリアがおられるイエスの故郷ですが、イエスがそこに来られるのは、他の土地と同じように、安息日の会堂でみことばを宣べ伝えることが目的なのです。そのようなイエスを迎えたナザレの人々の反応は、今日の福音に語られているとおりであったのです。

「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」というイエスの口から漏れるみことばを、わたしたちはどのように聴いたのでしょうか。ナザレの人々の間で洩らされたイエスのみことばをわたしたちは今日のミサの中で聴いています。このイエスのみことばをナザレの人々に向けられたみことばとして聴くだけでは、わたしたちは今日のミサの中で本当にはイエスをお迎えしていることにはならないのかもしれませんが。

今日の福音がわたしたちに求めていることは、わたしたちのイエスとの関わりがナザレの人々のようになってしまうのではないかということを反省することであるのかもしれませんが。わたしたちもまた、あまりにもわたしたちの信者としての生活に慣れすぎてしまっているのかもしれませんが。あまりにもわたしたちの教会に慣れすぎてしまっているかも知れません。日曜日こうしてささげるミサに慣れすぎてしまっているのかもしれませんが。

わたしたちは、心のどこかで、わたしたちがどんなに祈っても、先週の日曜日に聴いたイエスの力あるみわざは、わたしたちの中に起こるはずはないと決めてかかってしまっているのかもしれませんが。しかし、本当にそうなのでしょうか。確かに、わたしたちは先週の日曜日に聴いたようことが、わたしたちの中でイエスによってなされることを経験することはないでしょう。けれども、わたしたちが信じているイエスは、病の絶望の中からわたしたちを救いだしてくださるお方であり、死の闇からわたしたちをいのちの光の中に立ち上がらせて

くださるいのちの主です。そのいのちの主であるイエスが、今日もわたしたちをここに呼び集めてくださり、十字架の上でわたしたちのために与え尽くしてくださったいのちを、聖体の秘跡を通してわたしたちに注ぎ込んでくださるのです。

今日の福音の結びは、「イエスは人々の不信仰に驚かれた。それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった」と締めくくられています。わたしたちの中に確かに来てくださるイエスが、あのナザレのときのように、わたしたちの間を通り過ぎてしまうことのないよう、心を込めて今日のミサをおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高